

第23回佐賀県総合教育会議（R4.8.16）

1 開会

○前田政策総括監

それでは、ただいまから第23回佐賀県総合教育会議を始めさせていただきます。

私は、本日の会議の進行を務めさせていただきます政策部政策総括監の前田と申します。よろしく申し上げます。

それでは、開会に当たりまして、山口知事から御挨拶を申し上げます。

2 あいさつ

○山口知事

お疲れさまです。今日は柔道の近藤選手、60キロ級の佐賀県トップアスリートの任命式をさせていただきました。彼は県外の高校に行くかすごく迷っていた中、私の話に応えるように、武雄に住んでいるのかな。有田中学校に通っていたんだけど、高校は佐賀工業を選んでくれて、結局ここからオリンピックを目指すことになって、高校のときはインターハイでも2連覇したりとかして、今、大学3年生ということで、これから60キロ級というと非常に強い、それこそ亡くなった古賀選手の次男もその級だし、オリンピックで金メダルを取った高藤選手もいたりして。

結局、何が言いたいかというと、近藤さんのお父さんもお母さんも一緒に来られたんだけど、すごく参考になったのは、どうやって育てたのかというときに、やはり自分で決めさせるということと、家の中で子どもが遊ぶときでも親が本気で遊んでいたと。本気で遊ぶというのはどういう意味なのかよく分からなかったところもあるんだけど、要は本気で子どもに対応して、決めさせるのは子どもだと。だから、5人子どもがいて、下の妹の美月ちゃんというのはこの前、四国総体で日本一にまたなったんだけど、じゃ、下の3人はどうするのかという話をすると、それは自分が決めることだからと、当たり前の返事が返ってきて、自分で意思決定をしていくということ、これはスポーツの世界だけじゃなくて、スポーツの世界で、亡くなった古賀稔彦さんもずっとその話をしていて、結局、人に言われた稽古は身につかない。これはどんなスポーツでもそうだと思いますけど、コーチや監督に言われて、これをやれと言われて、それをこなすだけの選手はそれなりの選手で、やっぱりその一つ上を狙える選手は、自分で考えて、何のための稽古か練習かというのを考えてやっている。ここまで成長したかったら、そこになるために何を成すべきなのかと

いう自発的な気持ちというのが大事だということをおっしゃっていて、今佐賀県は、例えば、学力の問題でも非常に厳しい状況が続いているというふうに教育長から報告を受けていますけど、自分の過去を振り返ってきても、勉強が身についたというのは、自主的に自分の思いで勉強したとき、特に人からやらされている、勉強時間を親から言われて何時間は必ずやりなさい、宿題、夏休みはこれだけやりなさいと、そんな勉強は何の意味もなかった。自分でこういう学力をつけたいから、こういう大学に行きたいからといって、自分で目標立てて勉強したものというのは身についたし、だから、自分で考えてみると、授業でヒントは教えてもらった気がするけれども、その授業から全てを身につけて、それを宿題でフォローするというのはほとんど身につけていないです、僕は少なくとも。

やっぱり自分でやる分というのは本当に身につけているし、それを先生に分からないところは聞く、ということ全般に教育に置き換えてみると、やっぱりいろんな意味で自分が考えて物事をやっていくというふうにするというのは大事だし、妙に依存するとか、親がこうするとか、先生がこうして管理するとかいうのではなくて、それぞれの生徒が自分の思いで勉強したり、自分の思いでスポーツをしたり、文化活動をしたりというのがまず大事ではないかと。まさに18歳成年もそうですけれども、その部分が身につけてさえいれば、いろんなところで課題は起きない。人に言われてばかり、依存体質でばかりいて、例えば、先生のせいや親のせいばかりしている子が18歳になったとして大丈夫だろうか。それこそ、金銭的な対策関係を自分でやるようになってという問題意識が出るのと、もう一点あるんです。

それともうちょっと角度が違うんだけど、じゃ、自分で頑張ります。ただ、頑張れ、頑張れというような社会で、もちろん自発的に頑張るということは大事なんだけれども、何か壁にぶつかったときに相談してもいいんだよというのも大事だと思う。だから、自分で自発的なボランティアの意思で、自発的にやっていくというところとセットで、何か壁にぶつかったりとか、悩みがあったときに相談しても大丈夫だよというメッセージは、もっとこれは合わせて教育の現場で伝えたほうがいいんじゃないのか。頑張れ、頑張れ、頑張れと言われて、一生懸命走って行って、何となく相談したらいけない、いいんだよ。人はみんな悩みがあるわけだから。友達にでも先生にでも何でも、相談窓口に行ってもいいんだよというところも、この両方、実はこれは別に背反している話じゃなくて、自分でいろいろ考えていくということと、どこかに行き詰まったり、悩みがあったり、自分で練習をしながら、この練習は正しいんだろうかと思ったときに、指導者に聞くのは全然恥ずかしいことではないし、オーケーだからという、その2つのことをしっかりと子どもたち

に伝えるということができれば、結構いろんなことが解決されるんじゃないかなと。どっ
ちかに寄っちゃいかん。両方ちゃんと教えてあげるとのことというのが一つ、18歳成年
に関してヒントになるのかなと思うし、技術的にはもちろん社会に役立つような教育をや
っていくということなんかもあったかもしれないけど、これは本質的なところでその部
分の議論ができたなら総合教育会議としてはいいのかなというふうに思っております。よろ
しくお願いします。

3 内容

(1) テーマについて説明

○前田政策総括監

それでは、本日の議題に入らせていただきます。

本日は18歳成年、こちらについての意見交換となります。

次をお願いします。

18歳になりますと、選挙権が行使できたり、親の同意なしで契約行為ができたりと、
様々なことができるようになるわけでございます。子どもたちが成年を迎えるまでに自分
で考え、行動できる力をつけるためにはどのような取組が考えられるのかということにつ
いて意見交換をお願いしたいと思います。

今回のテーマですが、飯盛委員から御提案をいただいております。ありがとうございます。
した。

それでは、飯盛委員からテーマの内容についての御説明をお願いいたします。

○飯盛（清）委員

成年年齢の引下げの経緯ということですが、まず、高校において具体的な取組をより重
要視していく必要があるというふうなことを、現在、私立の高校に勤務していますが感じ
ています。

具体的には、先ほどのページであったんですが、選挙権、それから消費者契約、それか
ら高校の退学などもおそらく自分の意思で、それから、生徒同士で結婚などということも
今後出てくるんじゃないかなというふうなことを考えております。

私の個人的な話かもしれませんが、マスコミでは消費者教育、それを最重要視している
ようなところが感じられます。もちろん、被害者になる可能性ということで、しかし、選
挙権、2015年に選挙権が18歳に引き下げられたんですね。でも、投票率が思うようにな

かなか伸びない。ただ、さっきも言いましたけれども、高校を自分の意思で退学できたり、在学中に結婚したりというようなことは、高校側としては気になるんだけど、消費者教育のほうで被害者になるということで、何とかということで事前に策を講じたほうがいいんじゃないかというようなことを心配している動きが強いような気がしております。

約半年たちましたけれども、テレビの報道等で、こういった事例はなかなかまだ出てきていないので、うまく対策ができたのかなというようなところですが、そろそろかなという動きも逆に心配しております。

18歳としてふさわしい、それこそ先ほど知事がおっしゃった判断力、行動力を身につけていくことが大切であると思っております。

18歳の投票権は7年前に引き下げられました。若年層が投票率が低い、シルバー民主主義というような言葉もあるというふうに私勉強させていただきました。

それから、民法上の制度とも合わせるべきではないかというようなことで18歳に引き下げたというようなことで、2020年の4月に引き下げられたわけです。

課題として、学校の取組がここに挙がっておりますが、外部講師を招いての講演会や授業、それから、その他の関連機関との連携事例ということで、高校で主権者教育の取組例が挙がっております。2015年、18歳に選挙権が引き下げられたときに、総務省と文科省が一緒に出した「私たちが拓く日本の未来」という資料があります。これは指導者用の補助資料なんですけれども、全高校生に配られたという、今はもう毎年1学年分届いております。

消費者教育については、心配されること、被害者になることを防ぐためにということであるいろいろな取組がなされているんですが、もう18歳になれば自分でローンが組めたり、カードを持てるというふうなことです。

先ほどちょっと雑談でしておったんですが、小学生の担任から聞いたお話で、今年久しぶりに修学旅行に行けたと。小学生の場合は、一応決まりとして持っていく小遣いを決めるんですね。今どれぐらいなんだろうかね、5,000円ぐらいなのかな。それは1泊の旅行に行って、お土産などを買うように、それを使って消費者教育というか、そういったものの一環を狙っていくわけですが、ところが今年、その担任が言うには、自分は久しぶりに行ったと。子どももスマホで電子決済するから、そういう決まりが何にもならなかったと。高校なども多分同じようなことでこれが進んでいるんじゃないかなというような気がします。

ただ、さっきも言いました消費者教育をしっかりとっておかないと怖いなという部分は、我々年代は現金を支払うということでお金の価値ということが目に見えて分かっているんですが、全くそういった感覚がない子どもたち、そういった経験がほとんど少なくなっている子どもたちが、要するにカードでピッとするだけで何万円、何十万円というのも動いていくと。お金の価値というものの理解というのが果たしてどうなるのかなという心配があります。今までのやり方が成立しないから、消費者教育をしっかりと、これは家庭の教育もしないといけないのではないかなという気がしています。

消費者教育の取組例ですが、先ほどの主権者教育と比べるとやっぱりまだ事例が少ないということがここから分かると思います。

今後に向けてということで、キーワードですけれども、いろいろ投票率、政治、それから、社会、法律・ルール、SNS・メディア、高校退学の中に我々が考えている佐賀への誇りとか、いろんな自己肯定感、校則などというようなことでキーワードもありますが、私が提案した理由というんですかね、日頃思っていたことを少しだけ述べて終わりたいと思うんですが、校長会の会長として、代表で全国の校長会に出ていたときに、たまたま佐賀県のみ選挙でその結果が全国に報道されるという機会がありました、その会議の当日ですね。逆に気になったのが最低の投票率でしたというコメントが耳に残りました。それは自分の勝手な印象だったんですけれども、佐賀の教育力の低さというのを指摘されたような錯覚を持ちました。

実際は、全国との比較では、この会議のために資料を調べてもらったところ、決して47都道府県中、低いものではないと。結構上のほうにあったので安心したんですけれども、ただ、それは大差ない結果です。学力状況調査と一緒に。あれは下のほうになりますが、大差はありません。ただ、できれば毎回、佐賀県は若者を含めて投票率が高いですねという胸を張りたいなというような気持ちもあります。

教育基本法で一番最初に書いてある教育の目的という中に、国民としてしっかり識見などを持った子どもを育成しないとイケないということがありますので、教育の根幹にかかわる部分ではないかなというふうな気がしています。そのために、学校でやれそうなことなどについて意見交換をして、現在、18歳になったということで、高校任せになっているような気がします。小学校、中学校でもその辺りについてもっと取り組んでいく必要があるのではないかなというふうな気持ちを持って提案をさせていただきました。具体的な実態などについては後でまた述べたいと思います。

以上です。

○前田政策総括監

ありがとうございました。

それでは、これから意見交換に入りたいと思いますけれども、先ほどの説明に関しまして、何か補足的に御説明等はありませんか。

(2) 意見交換

○飯盛（清）委員

この6年間、18歳に選挙権が下りて、国政選挙、県内は10代の投票率が20代の投票率よりも高いという結果が明らかに出ております。10代ですから、18歳、19歳ですが、率でいくと20代よりも高いと。なぜ20代になると、その前に、高校で一生懸命指導していただいた結果だろうということも私はそれは思います。ただ、なぜ下がるのかなというふうなことの原因を考えますと、やはり自分一人が行っても行かなくても選挙結果に差はないだろうというようなことが一番の原因ではないかなという気がします。

平成21年の衆議院議員の選挙、政権選択がかかっていたというときは、69.28%という全国の投票率でした。これはやっぱり全国と比べると特段高くなります。昨年の令和3年秋の衆議院選挙は55.93%ということで随分下がってきています。ただ、これは私的な考えかもしれませんが、与党と野党の——失礼な言い方かもしれませんが、力の差といいますか、そこら辺りが原因になっているところもあるのかなという気もします。ただ、それは教育ではどうしようもない部分ですので、政治に関わっていかれる皆様に頑張ってくださいしかない部分であるというふうに個人的には思っております。

政治教育と政治運動を、学校の先生方がどうも誤解しているような印象があります。教育基本法にも14条で政治教育ということで、「良識ある公民として必要な政治的教養は、教育上尊重されなければならない。」ということで、しっかり指導をしていかないといけないという意味だと思います。ただし、2項では「法律に定める学校は、特定の政党を支持し、又はこれに反対するための政治教育その他政治的活動をしてはならない。」というふうに書いてあります。

公職選挙法の中にも、教育者が学校の児童・生徒に教育上の地位を利用して選挙運動することはだめと、そういったことが触れてありますので、選挙に関してはタブーというかな、先生が生徒にしゃべる、話をするのが、どうも錯覚といいますか、その傾向が強いのではないかなという気がします。

小学校でも、6年生の社会科で政治の仕組みについては勉強します。国会議員、衆議院、参議院、だから、18歳になったら必ず選挙に行こうねというところは、なかなかそこまで、小学生でもありますので、行かないと。中学校でどうかなというと、多分同じような状況ではないかなというような気がしております。

補足というか、この辺りまでで結構です。

○前田政策総括監

ありがとうございます。

主権者教育ということに対して、委員の皆様から御意見ございますでしょうか。

○山口知事

教育長に1回聞いてみたかったんだけど、学校現場で、政治活動はダメだけれども、政治教育はいい。例えば、生徒が署名活動をするのはオーケーなんですか。例えば、戦争反対とか、それはダメ。

○飯盛（清）委員

オーケー。大丈夫です。

○山口知事

オーケーよね、そこはね。

○落合教育長

そこをダメだと指導して、それを違法だとされた前例がありますね。

○山口知事

ダメだと言われたという人がいたんですか。

○進政策部長

何か言われがちでしょうね。

○落合教育長

多分言われがち、先ほどあったように、過剰に意識しているところは学校はあるのかも
しれません。

○山口知事

もちろん、政党をどうこうという活動はだめだと思うんだけど、そこはね。だから、
基本的にその中でいろいろ意見交換するのはいいわけですね、署名したりね。

○進政策部長

思想信条ですからね。

○落合教育長

具体例になると悩むグレーなところが出てくるでしょうね。先生たちが悩むような例と
いうのが。

○山口知事

そうね。でもやっぱり日本の生徒たちって、さっき冒頭も言ったように、自分の意思で
判断するところがちょっと弱い気がしませんか。するよね。

○落合教育長

校則のときも議論しましたが、やっぱりいろいろ言い過ぎているんじゃないかと。子
どもたちの自主責任、自己判断というところに委ねる部分が非常に弱いかなという気はし
ますね。

○山口知事

それがずっと高3ぐらいまで周りの管理の下に、親と先生の管理で、突然18の大人と言
われてもというのがすごく日本的で、それこそフィンランドなんてもっと早いうちから君
の人生って、自立させられて育てているところがあるからさ。

○落合教育長

18歳の前に、人間としての土台の部分ってどうなのというところが問われると思います

よね。

○山口知事

ねっ。

○飯盛（裕）委員

校則の話であれですけど、牟田委員から聞いたんですけど、西高なんかはこの間1週間、私服でもオーケーにして、家を出たときにずっと私服の生徒がうろうろしていたんですよ。何だろうと思っていたら、期間限定ですけど、自分で服を着て、制服の子もいれば、私服の、短パンにTシャツの子もいる、それで補習を受けに来ていたりしているんです。そういう取組とか、その後どうするかちょっとまだ分からないんですけど。

○牟田委員

今お試し期間中で。

○山口知事

いいじゃない。

○落合教育長

そういうチャレンジをどんどんやってもらいたいですよ。

○飯盛（裕）委員

逆に、この暑さの中、長ズボンでいますからね。例えば、インとアウトは話題がよく出るじゃないですか。シャツを外に出すと体の温度が2度、3度下がるとかいう、何かメディアで最近よく出てくるので、あれも夏場の間は出していいよと学校側が言ったほうがいいんじゃないかなとか。ただやっぱり制服はきちんとしておかないと見栄えがよくないのか、だらしがないと見られる風潮はあるので。

○荒木委員

そのときに、何で制服を全国で自由に行っているのかということ子どもたちに伝える、

自主的に考えることがこれから必要になるんだよという考えの下でそういうふうになっているんだということを、生徒さんたちが理解してくださればいいなと思います。

○牟田委員

制服検討委員会なるものが存在して、今やっているんですよ、西高。

○山口知事

妙に詳しいね。

○牟田委員

子どもが行っているから。

○牟田委員

それでちょっとまた別の件で。僕は以前から15歳成人説の立場だからあれですけど、結局、先ほど知事もおっしゃったけど、やっぱり今の高校というのは、後ろに現場の先生がいるから言いにくいけど、管理、管理なんじゃないかなと思うんですよ。管理すれば楽だからね。3年間管理して、勉強だけしておけば、実業高校で授業させておけば卒業しているから。でもそれだったら、大人になれないんだよね。

○山口知事

そう。

○牟田委員

だから、高校の間に大人になる準備をせにゃいかんというのはおっしゃるとおりだと思うんですよ。

実はさっきも言ったけど、高3の4月生まれは18歳で大人になっちゃうから、あんまり縛れなくなっちゃうんじゃないかという話がある。だって、バイトしたかったら、俺バイトするよと言ったときに、成人の人がバイトするというけど、あんまり高校生はしちゃいかんよって、その辺りはどうなるか考えていないよね、佐賀県の県立高校は。実質、バイトしている子は県立高校はいると思うんですけど、それは家計的なものを助けないといけないというので、実質許しちゃうらしいんですけど、本当にフリーでバイトしていいよと、

社会のことを学べよと、おまえが稼いだ金で生きていくことも高校時代に学んでいけよってなっていくんじゃないですか、きっと。

○山口知事

本来、高校って義務教育じゃないんでしょう。

○牟田委員

そう。

○山口知事

だから、勉強するのも自由、やめるのも自由、バイトするのも自由だよ、本来。

○落合教育長

これまでは、高校と大学に入ってからはいくら落差があり過ぎじゃないでしょうかね。高校はそこまで一人前に扱っていない。

○牟田委員

特に実業系で就職する方は本当にすぐぽんと大人になるから。

○山口知事

そのギャップがね。

先生は楽かもしれんけど。

○進政策部長

どうすればいいんだという感じですね。

○山口知事

確かにそうなんだよね。だから、高校の先生もそこまで肩を張らなくていいんじゃないの、もう。どうなの。

○落合教育長

そうだと思います。これまでの経緯の中で、枠にはめていかにかいかなような歴史というのがあったのかもしれませんが。

○山口知事

戦後はね。戦後は分かるよ。戦後は違うからさ。あの頃はがちっとやるのが必要な時代であったと理解するけど、今は違うじゃん。

○落合教育長

そこが変わってきているんでしょうね。やっぱり求められている人材像ももっとクリエイティブな部分も求められているし。

○牟田委員

自分の子どもとか、その友達を見ていると、自由にしたからといって、そんなに道を外れそうじゃないんですよ。

○加藤委員

そうですね。やっぱり縛れば縛るほど、それを壊したくなるのが人間の……

何かやっぱり小・中と校則とかに縛られていると、やっぱり耐えることがトレーニングになっているみたいな、何かそんな感じがします。そして、自分で考えないまま、言われたとおりにするのが生きる生き方みたいな感じになっていて、それが今の企業文化にもつながっているのかなとは思っていますけど。

○飯盛（裕）委員

だって、やっちゃいけないことって法律で決まっているわけですからね。それを犯すと犯罪になって逮捕される。

○山口知事

だから、一番校則の最初のことと言ったけど、本当にやっちゃいけないことってあるよね、人を殴るとか。廊下を走るというのは、同じように書くなど俺は言いたいわけよ。本当に守らないといけないルールと、自己判断でやれることまでごちゃごちゃに校則に書かれたりしているのがすごく気になる。

○落合教育長

一時期、非常に荒れた時代があって、その頃にあれを治めるために厳しくしていったという経緯はあるんですね。ただ、今はそういう状況にないから、もっと子どもを信じていいんじゃないかなと。特に高校生になれば。中学と高校はちょっと違うと思われるかもしれないけど、高校生になったらもっと子どもを信じて待つということはあっていいんじゃないかなと思いますよね。

○飯盛（清）委員

やっぱり今までは責任問題、学校が怖かったのは、放したときに何か起きたら、学校は何をやっているんだという風潮が強かったです。

○山口知事

大変やったですね。

○加藤委員

何かあれですね、子どもはどんどん変化して、昔の子どもと全然違うから、やっぱり大人のほうも変化しないといけないんじゃないかなと思います。今の子どもは、10年前の子どもと全然扱い方が違うので、不登校対応も前と違うんですよ。だから、前は静かに刺激を与えないようにと言っているけど、今はアクティブにどんどん刺激を与えながらやっていくというのが主流になっているんですけど、やっぱりそういうふうに考えると、大人側のほうがもっと子どもに対応していくためには変化しないといけないと。一方的なやり方が今も主流というので、生徒指導とかですね。

○落合教育長

学校で縛らない、という反対側には、生徒自身の責任とか、家庭の責任とか、地域の責任等がくっついてくるので、そこも一緒に変わっていかなきゃいけないところがあるんですね。学校に非常に重いことが求められているというのが最近ずっとあっているみたいで、そこはセットでやっていかなきゃいけないかなと思います。

○飯盛（清）委員

保護者の方々の意識というのも、自分たちの高校時代という意識は強く持っておられるから、それで当たり前でしたから、何でおまえたちのときにそんなに緩めるんだみたいな意識があられるでしょうし、逆に、若い保護者の方が、私から比べて若い保護者の方が増えてきたから、そういうもっと自由でいいじゃないかという、今ちょうど過渡期というか、そういう時期じゃないかなという気がしますね。

○荒木委員

私は大学に勤めていて、いわゆる高校から解き放たれた、まだ18歳ぐらいの子どもたちがいっぱいいて、スポンジみたいにいろんなことを吸収して行って、いいことも悪いことも吸収してしまって、ちょっとそれ大丈夫かなみたいなところに、先ほどのお金を借りるとか、そういうところに行ってしまう子も残念ながらいて、先ほど知事がおっしゃった、自主責任で自主性に任せてというのも、後ろには間違ってしまったときにフォローできる人たちが学校とか地域とかにも必要なのかなと思っています。1回でも間違ったらすぐ皆さんに非難されてしまうような風潮があるので、間違えることが学校も本人も怖いというところがあるんだけど、若いときはみんな間違っちゃうから、間違っちゃったけど、こっちだよってフォローしてくれる体制というのが今、地域、学校、全てにおいて必要になってくるんじゃないかなということを大学にいて思います。

○山口知事

全く同感で、だから、やっぱり自分でやって、ブラックリストに載ったりしてやばいってなったときに、相談窓口にちゃんとセットでやらないと本当におかしくなっちゃうやつがいるから、相談さえできれば、そうならこうやってやればいいんだよと、そういう間違いというのはすごく自分の財産にはなるので。

○進政策部長

ずっと管理されて育っていくと、相談の仕方も分からない。抜けられる穴がないという感じですよ、見ていて。

○荒木委員

怒られちゃうんじゃないかと。

○進政策部長

だから、社会人に出てもそういう新規採用の子とかを見ていて、そういう子がいます。自分でずっと抱えて、どうすればいいか分からない。

○山口知事

分からなくてな。

○進政策部長

全部教えてもらわないと分からないです。だから、早目に高校生のうちから、そういうのを自分で考えさせる力が……

○落合教育長

人に相談することでかなり軽減するのが大いにあるじゃないですか、我々でも。

○山口知事

だから、そこがね、俺は何人かに聞いたことがあって、相談しちゃいけないんだと思って育ってきたというか、頑張れ、頑張れと言われて、人に相談するのはだめなことだと、そんなことはない。いいことだから、相談するというのは。だから、それがセットでチャレンジもできるわけで、苦しいときは苦しくて、もちろん親に言えたら親にも、先生にも、いろんな窓口なので、今、社会ってすごいいろんな窓口があるんですよ、県庁でもね。ぜひそこに相談してほしいなというところを僕らは考えているわけ。そうしたら、アドバイスができるし、家で引き籠もっている子もいっぱいいるから、ちょっとでもいいから、トントンってやってくれたら、そこから何かが始まってくるんだけれども、それを教育現場からいいんだよって、相談して大丈夫だよというのをどこかで教えてほしいな。

○飯盛（清）委員

学校の担任の先生は、「何かあったらいつでも言っておいでよ」ということは、それは全部の先生が言っていると思うんです。それが今までの話に出ていたように、受けている側は、いや、そんな弱みを見せちゃいけないとか、あるいは何回か相談に行ったら、それはあなたの考え過ぎと言われたとか。

○山口知事

そうそう。

○飯盛（清）委員

あと、相談に行っていることを友達に知られるというのが怖いというか、それがいじめの原因になるんですね。そういったようなものもあるみたいですね。

あと、ヤングケアラーの問題がだんだん大きくなってきましたけれども、家のことは学校に相談すべきじゃないんだとか、そういう意識も随分あったみたいで、学校としては、こんなことを相談してくる子もいるよとか、こんなことでもあったよとか、そういったのをどんどん担任としては情報を流してやって、そんなことでもいいのというような雰囲気をつくっていかないといけないんじゃないかと。

○山口知事

よく部活とかクラスで連絡ノートに書かせることでうまくいくというパターンが多いのは、それで解決しているわけじゃなくて、自分として何かを吐露しているというだけで大分すっきりするとか、人間そうじゃない。そうすると、みんなから話を聞いてもらったりしているだけだから、大分解決しているとか、楽になれるとか、ずっと抱えて何もしゃべらないでずっといるとだめだから。

○飯盛（清）委員

いじめのアンケートというのを毎月1回、どこの学校でも取っているんですが、ずっとチェックを入れて、最後に自由筆記の欄があって、何か困ったこととかがあったら書きなさいというふうな文言にしていると、「あの子なにか書きよったばい」となるんです。だから、そういう文言の質問じゃない、何でもいいから書いてくださいみたいな、そういうふうな聞き方を今しているんですけどね。

○牟田委員

相談もいいんですけど、まずは元に戻るんですけど、自由に判断できる環境にしていけないといけないんじゃないかと。結局、管理するほうは楽で、高校生も管理して、変にな

らないような、というのはやっぱり楽なんじゃないのかな。でも、自由があって、初めて政治にも興味が出てくると思うんですよね。だから、自由にすることが先なんじゃないかと思うんですよね。そしたら、政治に関する関心もでてくるんじゃないかと僕は思うんですけどね。

○落合教育長

現場の校長に発言させてもらって。どう思われますか。

○原岡学校教育課長

昨年まで、校長をしていましたけれども、ちょっと皆さんがイメージされているほど管理というのは全然強くなって、確かにそういった側面というのは昔からの流れとしてはありますし、傾向としては確かにぬぐえないところはあると思うんですけれども、やっぱりそれじゃいけないと。子どもたちに、知事も最初におっしゃったとおり、いかに考えさせるか、主体的に考えさせるかというような場面をいかに仕掛けていくかというようなところは、例えば、授業の中でもそうですし、いろんな学校行事の中でもやっていきますし、例えば、校則にしても、これまではあれだめ、これだめという言い方しかしていなかったんですけれども、なぜこれがだめなのかということを生徒自身に考えさせる。

例えば、私、去年は商業高校にいたんですけれども、商業高校だとビジネス教育、ビジネスマナーというのがありますから、ビジネスマナーという観点で見たら、この校則はどうなんだろうねということを生徒に考えさせるということをする、例えば、子どもたちがこういう状態であればこうしたらいいのかなというのを教えるし、考えることになる。そういう材料というのが実は学校の中にはいろいろ転がっていますので、そういうのを生徒に投げかけるというような風潮は、今、学校の中で出来ているなというふうには考えています。

○牟田委員

自由にはなってきたと思いますけどね。

○原岡課長

でも、やっぱりまだ一部には、確かに管理したほうが楽というような考えもないとは言えません。ただ、変わりつつあるということです。

○落合教育長

制服一つとっても、やめてもいいじゃんという投げかけは常にしている。だから、なかなかそこを変えないところは保護者の意向、本人の事情いろいろありますけど、さっきの西高の例じゃないけど、そういうのをチャレンジして、そういうのを捉えてやってもらいたいですよね。

○牟田委員

娘が高1で服装が自由だったから、父親としては、かわいいワンピースでも着ていったらとか言ったんだけど、それも自分で嫌だと言っているのね。ジーパンにTシャツで行っていましたが、高校生はこんなもんよと。だから、自由にしたらと言っているのに否定して、華美に流れるとかいう意見はあるんですけど、多分ない。彼女たちはきちっとわきまえてというか、高校生らしさの私服で行っているんじゃないですかね。自由にした上で自分でどうコントロールするかということを教えてあげたほうがいい。

○山口知事

それは、西高のフリー制服は、生徒の中でルールを考えるんですか。

○牟田委員

生徒の中で考えたのを学校に上げて。

○山口知事

いいじゃん、それ。それでいいじゃないですか。

○進政策部長

それでいいですよ。

○山口知事

その責任は生徒が負えばいい、問題が起きたら。

○牟田委員

結論は出していないみたいですけどね。

○山口知事

何かそれで、今は生徒会とか、ちゃんと選挙しているんでしょう、生徒会長とか。民主的な手続の中で、それで問題があったら、それはちゃんと申請すればいいし。

○牟田委員

制服に加えて、それからまた、PTAの意見も入ってきている。

○落合教育長

西高のような動きというのは、私としては常に校長に推奨しています。ただ、まだ動きが出てきたのは西高ぐらいなので、まだまだ校長にとっては非常にハードルの高い話なんです。

○山口知事

社会と一緒に、幾らか問題が起きれば、人生も一緒に、問題が起きたときにどうするのかというのが一番の勉強だし、いろんな意見があるわけだから、制服だってさ。それを生徒の中で意見を闘わせながら一定の方向に行くというのは、じゃ、モデル事業にチャレンジして、1回、夏休みでやってみようとか、決めたわけでしょう。

○牟田委員

そう。

○山口知事

すごい大人だなと思うし。

○牟田委員

それが民主主義でしょうね。

○山口知事

それが目につくよね、一番ね。

○飯盛（清）委員

校則をちょっとやろうと思ったときに、意見を出して行って話合いをして、少しでも改善していくと。それが国の参政権じゃないですけど、主権者教育で、同じ仕組みなんじゃないかなという気がしますね。だから、小学校段階、中学校段階、高校でそういったことを含めてやっていけば、確実に成果は、何年か先には出てくるような気がしています。

○山口知事

だけど、投票行動って、別に誰にどう入れたから正しいってないじゃないですか。自分の中でイメージでやるしかないの、それはまさに校則と一緒に、一長一短の中で、そういう中でみんなで選択するという、みんなが投票行動を起こして参加するというところに大きな意義があるわけで、その辺の感覚が分かるんじゃないかな、そういうことをやっていくと。

○進政策部長

そういうことをやっていくと、こうやっていくと変わるし、社会の仕組みが分かってくるんですね。

○山口知事

だから、投票すること自体がすごく大事なことだということに感覚的に気づいていく。

○落合教育長

一昨年の校則一斉見直し的时候も、生徒の意見をしっかり聞くというのを求めたわけですけど、生徒もルールに対して意見を言っているんだと、それにみんなが賛同すれば変わるんだというのが分かると、何か意識が変わってくるんじゃないかなと思いますよね。

○進政策部長

生徒会長を選ぶ重要さとかも分かりますよ。こうだったら嫌だから、じゃこっちにしようとか、そういうのは政治にも関係してくるじゃないですか、社会をどうつくっていくかというところで。関係ないやという意識が強いんですよね、投票率。

○落合教育長

今までのルールを押しつけられるものという……

○進政策部長

だから、自分で変えられるものじゃないという感じなんです。

○飯盛（清）委員

高校で主権者教育の部分で、昨年度の秋の衆議院議員選挙も、各党の公約を、党名を伏せて、AとBとCという形で1枚ずつ用意して、それを説明しながら、じゃ、あなたはどれを選びますかという模擬投票をやったら、全然違う結果が出る。だから、やっぱりあなた方が選挙に行くと少しは変わる可能性があるんだよというようなことの勉強にはなったということで面白いなと思います。

○進政策部長

僕、高校のときの部活の予算の配分も全校集会で決めていました。何であの部がこうなったのか説明しろみたいな。うちの部に予算をよこせとか。

○山口知事

ずっと生徒会が反対しているから、中間試験はないんだと。

○進政策部長

そうです。ないです。

○山口知事

そういうことをやると部活ができなくなる。

○進政策部長

できなくなる、まさに自治が強いですね。

○牟田委員

元に戻るんですが、消費者教育も弁護士会でやっているんですけど、バイトの話に戻るのだけど、やっぱり自分のためとか、そういうことをやっていかないとだまされちゃうんですよね。

○山口知事

バイトいいんじゃない。大体、最近、佐大生が全然バイトに来ないのはどういうことですか。

○荒木委員

理由はわかりませんが。

○落合教育長

高校はバイトは認められているんですか。

○原岡課長

バイトは基本、許可制になっています。

今おっしゃったみたいに、私もアルバイトはやらせたほうがいいんじゃないと。商業高校でしたので、アルバイトすることが非常に勉強になるだろうというふうな提案をしたんですけれども、そうすると、多分、部活動からアルバイトのほうに流れてしまって、部活動が成り立たなくなるというような意見がありました。

○飯盛（裕）委員

そこは選択を自由にして、スポーツを選ぶか、自分で社会に出てお金を稼ぐことを選ぶか、その決定をするのは多分本人でいいんじゃないかなど。

○山口知事

そうだね。

○牟田委員

絶対それはしたほうがいいよね。

○落合教育長

そういう意識ある先生も増えていますから。

○山口知事

でも、子どもに選択させようとするよね。どっち行くって。どっちで遊ぶって。

○飯盛（裕）委員

習い事にしてもそうじゃないですか。今、子どもに何個かさせていますけど、将来的にこれをやりたいというのが多分出てくるでしょうから、また別のをしたいと言い出すかもしれないですけど、やっぱり本人がのめり込まないと。親がこれやれ、あれやれと言っても、嫌々ながら……

○山口知事

よろしくない。身につかないし。

○飯盛（裕）委員

お金の勉強って、さっき話が出ていましたけど、年齢が下がることによって、iDeCo とかつみたて NISA の加入できる年齢もたしか20から下がりますよね、2023年1月1日から。だから、そういう教育も学校でやったほうがいいんじゃないかなと思うんですよ。結局、将来のために2,000万円必要と今、国が言っているじゃないですか。でも、じゃそれをどのように積み立てていくかという教育を若い頃からしていかないと、若ければ若いほどスタートすると良いのが複利のシステムなので。

○進政策部長

金融関係は結構最近やっているんですよね、学校教育で。

○飯盛（清）委員

高校の家庭科とかでね。

○落合教育長

どこまで生々しくしているかは別だけど。

○飯盛（裕）委員

でも、日本ってお金もうけが悪いことみたいな、そういうのがあるでしょう。でも、決してお金の勉強をするというのはネガティブじゃないと思うんですよね。

○加藤委員

株とかよくやっていますよね。

○飯盛（裕）委員

株とかもそうですし。大学的时候にシミュレーターというのがあって、自分のお金はかけないですよ。でも、あなたに200万円やりますよと、自分のアカウントをつかって、それでずっと運用して行って、1年後にあなたは幾ら増えました、あなたはなくなりましたねと、そういうクラスで競争したりとか、そういうのも教育に取り入れたりしているんですね。全然お金に影響がないけど、お金の勉強ができるツールって結構いろいろあると思いますね。

○牟田委員

お金はやっぱり学べますよね、社会は。だから、バイトとかしたほうがいいし、あとの前、知事おっしゃったけど、移動、バスとか電車の移動もしたほうがいい。それで、僕、そのときそうだと言って、実際、自分の子どもが熊本にコンサートに行きたいんだけどパパとか言われたときに、あれっ、一人で行くのってなったんです。妙に心配してしまう自分がいた。だけど、本当に行かせて、自分で切符買って動いていくということは経験させなきゃいけないと感じました。

○進政策部長

確かに東京の高校生ってそこら辺で移動していますからね。

○山口知事

だけど、うちの高校の娘とかさ、スマホとかでいろいろやるわけだけど、そうすると、久留米から新鳥栖まで新幹線とかに乗るわけ。今回はオーケーだけど、お父さんが払うからとか。子どももこれで、経路もこれだからと。

○進政策部長

最短で最速ってこれだなと、出ちゃいますもんね。

○飯盛（裕）委員

何事も経験しないと多分勉強にならないと思う。失敗するのもよし。私なんかは前、10代の頃にオーストラリアに住んでいたんで、もう何が何でも国際線に乗らないといけないじゃないですか。最初、初回の2回ぐらいはJALとか航空会社が提供しているファミリープランみたいなので、到着したらグランドの人がこっちに連れていってくれるとかあるんですけど、何回も繰り返しているうちに、18ぐらいで自分でここに乗り継ぎ行ってとか覚えちゃうので、何かそこまで親も心配していなかったというのもあるし。

○飯盛（清）委員

何か日本でも子どもの一人旅を推奨するような動きがひと頃あって、開札口でそういったことを伝えると、車掌がちゃんと対応してくれて、降りるときにはまた待っていてくれるというのがあったんだけど、何かそういう名札をつけていた。それで、こいつ一人なんだという悪い者がいると。逆のことで、何か今あまり使われなくなった。

○山口知事

でも、飛行機はやっているよね。一人だけCAさんがちゃんと連れてね。

○進政策部長

飛行機とかなんかは閉じた空間なので、やっても途中は心配ないけど、電車だといろいろ出入りがあって。

○落合教育長

駅とかターミナルに出た状態になると危険性が出てくる。

○牟田委員

けど、危険もあるけど、とても学びがある。

○進政策部長

それはそうなんですよね。

○山口知事

18歳になったらすぐ危険になるわけでしょう。

すごく気になったのは、都市部の小学生は子ども同士で山手線に乗っているから。

○進政策部長

そうなんですよ。

○山口知事

佐賀は、高校になってまで親が送り迎えしている。

○飯盛（裕）委員

今、佐賀大学のキャリアセンターと産業人材課が一緒になって、サガHR交流会というのをやっているんですけど、そこに私、ちょっと携わっていて、佐賀中の県内の企業、大手から小さいところまでですけど、集まって、人事担当の人たちが学生をサポートするいいプログラムがあるんですね。そこに来ると、何かハードルが高いのか、あんまり参加者がまだ来ないんですけど、来た学生はいろんなことを本当に相談してくるんですよ。何かそういう相談の場があるよ、別に話した企業に就職しないといけないとか、そういう決まりもないので、社会人ってどんなですかねとかそういう、逆に人事担当の人間からすると、最近の大学生ってどんな感じなのかな、そういうのがいろいろ情報交換できる場になっていて、2か月に1回ぐらいあっているんですけど、すごい楽しい会になっていますし、そこを利用して、地場の企業と関係を持って、将来的に、最終的には佐賀の就職率を上げるというのがメインのターゲットではあるんですけど、やっぱり佐賀のよさ、佐賀の企業のよさを知ってもらうことが大切なんじゃないかなと思うんですよ。それを若いうちに

推奨していくというかですね。1個の取組として面白い。

○山口知事

学校にいる間って、自己判断しなくても何となく中・高とか、大学とか来て、社会人になると全然違う世界で、自己判断のお金の世界もある世界なのに、ここに対する情報って何もなくて、子どもたちにとって。社会人って何なんだろうかと。

○飯盛（裕）委員

結局、みんな3年生で就活を始めるじゃないですか。でも、もうその前の段階でいろいろ社会人とやり取りをしておくで、結構いろんな情報って入ると思うんです、1年、2年のときに。今この会に来ている子たちは結構1、2年が多いんですけど。

○飯盛（清）委員

昔も多分同じような、学校を出るまで社会のことは何も情報は入ってこなかったんだけど、それなりに対応していたら対応力があつた、昔の子どもたちはですね。今はそれこそ管理だけだったりが強くて。ちょっとしたときに自分で判断できないというようなことになっていくんじゃないかなと思って。少しずつ少しずつ進んできて、それが今も続いている状況かなと思って。

○山口知事

社会人になったって、親がいろいろ介入しているしね。

○飯盛（清）委員

ある大学の1年生に今年合格して、離れて大阪のほうの大学に行った学生の話によると、毎日の出席状況を親が確認できるんだそうですね。そういう制度がある。

○山口知事

まじ？

○進政策部長

すごいですね。

○荒木委員

御飯も生協とかで、今日は何を食べたとかが分かるように、親御さんがちゃんと栄養バランスを含めて、どれだけ食べられているかと。

○進政策部長

へえ。

○落合教育長

佐大もですか。

○荒木委員

人気です。2か月前にオープンキャンパスがあったんですけど、そういうのはありますかと聞かれました。あって当然かのごとく、ありますと。

○山口知事

放っといたほうがいいでしょう、大学生。

○荒木委員

本当にその、この空気感が親御さんとかと一緒にかというと多分違うとっていて、親御さんは今、18歳成年になって、自立させていかなきゃいけないという認識は、多分あんまりないのではないかなと。

○山口知事

子どもの3歳ぐらいのときのかわいい気持ちをいつまでも引きずっている親がいる。

たしか俺も嫌な予感がしたんだけど、佐大の入学式に呼ばれて、渋滞したときに、何でこんなに渋滞するのかと思ったら、親は来ちゃいけないのに、入っちゃいけないのに親が送っているわけだよ、九州中から。わざわざ入学式に。大学生の親は入れないんだよ。コロナで。

○進政策部長

コロナで。

○山口知事

入れないんだったら子どもだけで来いと言いたいけど、親が大分だ、長崎ナンバーのが渋滞しているわけだ、ずっところ。子どもさんを送ろうとして。

○飯盛（裕）委員

確かにコンビニの角に何人か立っていて、「ここで降ろしたりしないでください」という人が三、四人立っていました。

○進政策部長

へえ。

○山口知事

それはびっくりだね。何食べたかまで全部。本当それ、嘘でしょ。

○荒木委員

いや、説明しました。学生の親御さんも喜んでいらっしゃいました。

○飯盛（清）委員

私が聞いたのは関西の私立のお話しですから、多分、ほとんどどこでも。

○荒木委員

生協がやっているんです。どこの大学がやっているというわけではなく、そういうサービスがある。

○飯盛（清）委員

すごい進化ですね。

○牟田委員

何のために大学に行ったか分からなくなっちゃいますね。親がまた管理を求めているんでしょうね。

○進政策部長

そうなんでしょうね。

○牟田委員

少子化だから、親も暇なんじゃないですか。

子どもが7人も8人もいるときは、それはしょうがないけど。

○山口知事

そういうこと？

○牟田委員

多分、そういうことでしょうね。一人しかいなかったら、いつも見守ってあげたいじゃないですか。

○山口知事

いつまで見守るんですか、それ。

○牟田委員

多分、30になって40になっても見守っていると思う。多分、離婚の相談とかでも親が出てきますからね。

○山口知事

おかしくない。逆行しているよね。

○進政策部長

全くそうですね。

○飯盛（清）委員

今後、また少子化が進むということになると……

○荒木委員

ヘリコプターペアレントという言葉があって、子どもが下で危なくなったら、下にかけてきて助けてあげるという。

○進政策部長

ずっと上で見守っているわけですか、ヘリに乗って。

○荒木委員

はい。それではいけないなと本とかにはよく載っていたりするんですけど、そういう親御さんはすごく多いとは言われますね。

○山口知事

嫌な予感がしてきたな。

○進政策部長

どんどんみんなこうしていくんじゃないですか。

○山口知事

そういえば、最近、県庁にもさ、雨が降ると親が車で迎えに来ているとか、何か俺が聞いたときに、これはやばくないかなと思ってさ。

○落合教育長

親がですか。奥さんじゃなくて。

○山口知事

親だよ、あれはどう見ても、新入生の。

○飯盛（清）委員

送ってきているのは見ます。

○山口知事

俺があんまりそういうコメントできないけどね。何か嫌な予感がするなと思って、あのチーム。どうすればいいんですかね、自立する子ども、親がそうだと無理だよな。ヘリコプターペアレントだと。

○飯盛（清）委員

学校は子どもたちだけじゃなくて、保護者にも教育をしていく時代ではあるんですけども、なかなかそれは親にとっては一応自立した大人でもあるし、そうは言ってもうちの子はねみたいな感じで壁は厚いと思いますけど。

○山口知事

親にも事実的に考え方を少し、これでいいのかなと思うような仕掛けが必要だよな。

○飯盛（清）委員

3年先、5年先、どんなふうになっておられたらいいですかとか、例えば、あなたが会社の経営者であったとしたら、おたくの息子さんを採用しますか。

○山口知事

その親は、自分がいずれ先に死ぬわけじゃないですか。その後はどう考えているんですか。

○飯盛（清）委員

それまでが心配で心配でたまらない。

○山口知事

それまで心配して、あとはもうしょうがないと。

○牟田委員

財産を残していくんでしょうね、きっと。そういうこと。

○加藤委員

でも、今後、少子化は進むので、統計的には2030年までに25歳人口はすごい少なくなりますよね。

○飯盛（裕）委員

今、政府の予想より十何年先行っていますよね。

○加藤委員

82%だった。

○飯盛（裕）委員

多分、今年の出生って80万人を切るかなと言われているので、随分先行っています。コロナで産み控えになって。

○加藤委員

そこをやっぱり、子どもだけの責任じゃなくて、やっぱり家庭から何か変革を。

○飯盛（裕）委員

いろんなことがつながっていますよね。やっぱり経済もつながっているし、雇用とか給料が上がらないとか、そういうのがつながっての話かなと思うんです。

○加藤委員

教育だけで変えようと思うとすごく難しいんじゃないかなと思います。

○山口知事

それこそ、大きな意味で言うと政治だよ。地球全体としてのね。それはそう。

○落合教育長

学校が自己判断、自己責任というものをもっと表に出していくという話、社会に対するメッセージ性としては強いかもしれないですね。我々は覚悟が要りますけど。

○山口知事

でも、佐賀県がそういうふうなことを考えながら教育をやっているということは大きいと思うよ。こんな議論、多分よその県はそんなにしていないと思うので。管理するほうが楽だから。

○牟田委員

佐賀県から始めて。

4 閉会

○前田政策総括監

そろそろお時間でございますが、よろしいでしょうか。

ほかに御意見よろしゅうございますか。

それでは、以上をもちまして会議を終了させていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。